

中野徹三教授退職記念号によせて

札幌学院大学人文学部長
人文学会長 杉山吉弘

1999年3月、私たちの人文学部だけではなく本学全体の発展に大きな貢献を果たしてきた中野徹三先生をお送りすることとなった。最後の2年間は学部長として学部再編と大学院新設の重要課題に奔走されていた。その大切な仕事半ばの退職であった。奇しくも私が中野先生の課題を引き継ぐことになり、またこうして退職記念号の巻頭言を述べることになった。中野先生が取り組んだ人文学部再編構想の一部は、本年4月に開設される大学院臨床心理研究科として結実した。

中野先生の仕事の全体をこの短い文章で論じることはできず、ここではその一端に触れるにすぎない。大学人としての先生は、長い間本学の常務理事として文字どおり大学の改革と発展を牽引する中心的な役割を担った。教授会での激しい議論のなかで大学の将来のために熱心に自説を説く先生の姿が思い出される。洞察と意志がなければ、創造と情熱がなければ、理性もまた空虚であることを、先生は身をもって示された。先生は87年の学園創立40周年・大学開学20周年記念式典において、学園功労者として表彰されている。

教育者としての先生は、社会思想史の講義を軸におよそ35年の長きにわたって本学の教育に寄与した。先生は学生への思いを大切にしておられた。それも情熱的に大切にしておられた。国際交流委員会の責任者として学生の海外研修のために先生が提案していたプログラムの実現が難行していたとき、廊下で私に「学生のことを真剣に考えなければならない」と顔を紅潮させて語りかけてきたことを忘れることができない。

研究者としての先生が、初期マルクス研究をはじめとするマルクス主義研究の業績においてわが国の思想界に第一級の仕事を残されたことについては、知らないひとはいない。わが国の中だけではない。特に80年代後半以降の、イタリアやユーゴスラビアなどでの国際的な活躍は、同じ研究者仲間を触発するところ実に大きかった。

しかし、大学人・教育者・研究者としての先生が残した過去の功績や業績を語るだけでは十分ではないだろう。なぜなら先生の教えは、大学の内外で先生と活動をともにした同僚や友人、後輩や教え子たちのなかに今なお鮮明に生き続けているからであり、先生は今なお市民団体や国内外の学会で活躍しておられるからである。

最後にこの巻頭言をかりて、先生が私たちの大学とその学生ための尽くされた長年のご苦労に改めてお礼を述べるとともに、今後の活動の更なるご発展を祈念いたします。